

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	A-190	14-155 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Drinking pattern is more strongly associated with under-reporting of alcohol consumption than socio-demographic factors: evidence from a mixed-methods study. 飲酒パターンは社会人口学的要因よりアルコール消費の過小申告とより強い関連がある：定性・定量混合法によるエビデンスから</p>		
執筆者		
Boniface S, Kneale J, Shelton N.		
掲載誌		
BMC Public Health. 2014 Dec 18;14:1297. doi: 10.1186		
キーワード		PMID
飲酒、健康調査、公衆衛生、定性・定量混合法		25519144
要 旨		
目的：		
イギリスにおいて、アルコール消費の過小申告と人口統計学的・社会的要因およびアルコール関連要因についてのエビデンスはなく、質的研究もなされていない。本研究は、アルコール消費の過小申告とその要因との関連を明らかにすることである。		
方法：		
2011年英国健康調査における週間飲酒頻度、最大飲酒量、週間総飲酒量について、コンピュータを用いた聞き取り調査による結果と飲酒記録調査による結果を比較した。対象者は18歳以上の3,774名で、女性は50%であり、飲酒記録の有効回答率は69%であった。また、過小申告の理由を明確にするため半構造化面接を10名(男性7名、女性3名)に実施した。		
結果：		
飲酒頻度は、聞き取り調査より記録調査の方がわずかに多かった(3.4回 vs 3.2回, $p < 0.001$)。最大飲酒量は、聞き取りよりも記録で男性では0.7単位、女性で1.2単位多かった($p < 0.001$)。週間総飲酒量では、女性のみ聞き取りの方が1.1単位多かった($p = 0.003$)。多頻度飲酒、多量飲酒あるいは飲酒の種類や飲酒場所が変化する被験者では、聞き取りと記録の間により大きな差を認めた。聞き取りよりも記録調査で多量飲酒を申告している被験者では、決まった飲酒行動がないことや、自分では頻回に飲んでいないと認識していること、実験的アプローチを利用して飲酒を振り返っていることが、半構造化面接の結果から確認された。		
結論：		
多量飲酒と決まった飲酒行動がないことが、アルコール消費の過小報告に関連している可能性が示唆された。		